

## 空間における同時存在のカント的理解

岩井 拓朗

私たちは建物や本など、様々な諸事物を知覚し、それらが空間内に同時に存在していることを理解する。こうしたことはいとも簡単に行われるものの、それはこの作業が単純であることを示しはしない。それはどの程度複雑で、そうした理解に到達できるために私たちは何ができなければならないのか。カントの『純粹理性批判』第三類推はこれらの問いに対し、相互性のカテゴリーが必要だと述べる。その難解さから十分に理解されていないこの解答を、正当に評価するのが本稿の目的である。

1 節では第三類推理解のために本稿が扱う二つの問題、なぜ相互性のカテゴリーが必要なのか、それはいかにして同時存在の理解をもたらすのか、を提起する。2 節は第三類推と近い問題を扱ったエヴァンズの指摘を参照し、空間での同時存在理解が複雑な作業であることを確認する。これにより二つの問題を解決する手がかりが提供される。それまでの成果を踏まえ、3 節は第一の問題を、4 節は第二の問題を解決する。

### 1. 第三類推の概観と問題点の整理

#### 1. 1 第三類推の第一の問題とその解決

ここでは第三類推を概観し、それを理解する有力な方針として Morrison (1998) を取り上げる (1. 1)。次いで第三類推の理解のためにそれでも残る問題点を二つ指摘し、以降の本稿の課題を設定する (1. 2)。

空間における同時存在を認識するためには、相互性 (*Gemeinschaft*) のカテゴリーが必要だ<sup>1</sup>。これが第三類推でのカントの主張である。これはつまり、事物の同時存在を知ることができる主体は相互性のカテゴリーを所有している必要があるという主張である。カテゴリーの文字は現れていないものの、彼は「すべての実体は、空間において同時的なものとして知覚されうる限りで、一貫した相互作用のなかにある」(B256) という命題を示すことでこの主張を正当化する<sup>2</sup>。

カントのこの主張が抱える何よりの問題は、それが日常的な直観に反するように見えることである。例えば部屋にあるカステラとハンバーグのように、私たち

は諸事物が空間において同時に存在していると考え。しかしそれらの間に相互作用などあるのだろうか。もしカントの言う相互作用が何らかの力のやりとりなのだとしたら、そのようなものはないように思われる。もしあったとしても、私はそうした相互作用を一切考えなくても諸事物の同時存在を知ることができるだろう。このように理解の仕方によっては、相互性のカテゴリーが必要だというカントの主張は奇妙に聞こえる。

この問題を解決する方針としては Morrison (1998) が有力であり、本稿もこれに従う。モリソンは相互性を、力のやりとりとしてではなく、実体同士が互いの場所を決め合うこととして捉える<sup>3</sup>。したがってモリソンによれば、第三類推の結論は次のように理解される。空間内での事物の同時存在を理解するためには、相互性のカテゴリーに基づいて事物同士の場所が相互に定められると考えられなければならない。これは十分理解可能だろう。カステラの場所は周りにある事物との関係で決まり、その中には問題のハンバーグも含まれる。そして逆の場合もそうだろう。カステラとハンバーグは互いがそれぞれに対してどの方向、どの距離にあるのか等を定め合っている。このように考えることは十分可能である<sup>4</sup>。また空間における同時存在認識の条件としても、場所の相互決定というのは適切に思われる。実際カステラとハンバーグが部屋に同時に存在していることを知るために、それぞれの場所を理解していることは必要に思われるからだ。

この解釈はカントの記述からも支持されうる。まず相互性の内容としてカントは次のような定義を与える。

他方の実体に根拠が含まれるような諸規定を一方の実体が含むような諸実体の関係は、影響の関係であり、そして他方の実体が相互に別の実体における諸規定の根拠を含む場合は、相互性もしくは相互作用の関係である。(B258)

ここでカントは二つの実体が互いの規定の根拠を含むような関係を相互作用ないし相互性の内容としている。カントの実体概念の内容を確定するには第一類推の検討が必要であり、本稿の範囲を超える。しかしながら少なくともその定義からして、実体は経験を離れても存在し続けるものであることは明らかであると言える<sup>5</sup>。また後に見るように相互作用するものの例として月と地球などが挙げられている。したがって実体は物理的対象ないしそれに関わるものだけであると言えるだろう。すると相互性において考えられているのは、物理的対象のような、経験を離れても存在し続けるもの同士が互いの規定の根拠を含む関係ということになる。この

定義は極めて一般的なため、相互性を事物の場所の規定として理解することが十分可能である。さらに空間が相互性のカテゴリーを理解するために不可欠だとまでカントは述べている<sup>6</sup>。これはさらにモリソンの方針を支持するだろう。

しかし有力であっても、この解釈は決定的ではない。まず第三類推の記述が抽象的であるため、モリソンのようにしか考えられないとは言えない現状がある。またやはり自然科学の基礎づけというカントの目標を踏まえると、相互性を因果的な力のやりとりのようなものとして理解したくもなる<sup>7</sup>。しかしそれでも本稿は基本的にモリソンの方針で第三類推を理解することにする。これはそのような形で相互性を捉えられれば、同時性の理解に関する興味深い議論をカントから引き出せるからである。

## 1. 2 二つの問題点

次いでカントが第三類推で展開する議論を概観し、問題点を二つ指摘する。彼は相互性のカテゴリーを持たない主体が事物の同時性を認識できないことを示す。後に詳しく検討するものの、それはおおよそ次のような形で進んでいる。私たちが事物の知覚に基づいてその同時存在を知る際には、知覚の順不同性が手がかりだとまずカントは述べる。彼によれば、私たちは月を見て、その後には下を向けば大地、つまり地球を見ることができると述べている。それだけでなく、私たちは地球を見た後に、月を見ることも可能だと考える。このとき私たちは、月と地球が同時に存在していると認識するだろう。このように、異なる事物の知覚がどちらを先にしても行われうることは、知覚された事物の同時存在の手がかりとなる。しかしこのように知覚の順不同性から同時存在を認識するには、知覚だけでは不十分だとカントは指摘し、ここに相互性のカテゴリーが必要だとするのである。つまり彼によれば、私たちが知覚の順不同性に基づいて、事物の同時存在を理解するためには、相互性のカテゴリーが必要である。

ではそもそも相互性のカテゴリーとは何なのか。この問いは次の二つの問いへと細分化される。まずなぜ相互性のカテゴリーが必要なのか。次いで、仮に必要なとして、それはいかにして同時存在の認識をもたらすのか。この二点に答えることが第三類推の理解に不可欠である。そのために必要なのは第三類推の問題意識を明らかにすることである。しかしカントの記述は抽象的でありその作業は容易でない。そこで以下では同様の問題を扱ったエヴァンズを参照する。これにより第三類推の問題意識がより鮮明に理解されるだろう。

## 2. 複数の事物が同時に存在することを理解するために

### 2. 1 二つの空間概念

本稿は Evans ([1980] 1985) の 4 節を中心に取り上げる。まずその箇所的前提を概観し、具体的な指摘の内容を検討、整理する (2. 1 及び 2)。これにより、先の二つの問題を考察する手がかりが与えられる (2. 3)。

エヴァンズの指摘は多岐に渡るものの、ここでは本稿にとって必要な論点のみを扱う<sup>8</sup>。本稿にとって重要なのは、諸事物の空間内での同時存在を理解する作業が複雑であることに関する彼の指摘である。

彼は事物の空間的配置を理解する仕方として同時的空間概念 (simultaneous spatial concepts) と継起的空間概念 (serial spatial concepts) を区別する<sup>9</sup>。後者は主体の知覚や感覚の継起や系列の観点から説明されると言われる<sup>10</sup>。前者は関係的概念であり、暫定的に、その諸概念が最も直接的に適用されるのが、事物が同時に知覚されている場面だとされる<sup>11</sup>。エヴァンズは私たちの空間的把握を説明するのは同時的空間概念であり、継起的空間概念は内容に乏しく、私たちが日頃行っている空間的把握をもたらすことはないとする。まずはエヴァンズが挙げる例を用いて、両者の違いを詳しく説明することにしたい。

三つの事物 a、b、c がこの順で一直線に並んでいるとする。まず継起的空間概念を用いる場合には、三つの事物それぞれについての経験同士の関係に基づいてこの配置を知ることになる。a についての経験と c についての経験の間に b についての経験が挟まることから、並んでいる順序が abc であることを理解し、さらにそれぞれの経験を得る際にかかる時間を踏まえることで三つが直線に並んでいることが理解されるだろう。言ってみれば、継起的空間概念に基づく場合、a と b と c が一直線上に並んでいることは「a を経験したら c を経験する前に b を経験しかつそれぞれの経験を得るために要する時間が最短である」というような仕方で理解されることになる。このように継起的空間概念を用いる場合には、主体は自らが得た経験同士の関係に基づいて事物の配置などを知ることになる。このことから、継起的空間概念は主体の知覚や感覚の継起や系列の観点から説明されると先に言われたのである<sup>12</sup>。

これに対して、同時的空間概念によってもたらされるのは、知覚や経験の有無に関わりのない、事物の配列に関する理解である。例えば視覚を備えた主体が三つの事物すべてを視野に入れられた場合、その人は三つの事物の配置をすぐに理解できるだろう<sup>13</sup>。このとき理解された事物の配置は、三つの事物の一部ないし

すべてが知覚されていようがいなかろうが成立するものと考えられる。もちろん事物の配置された範囲が広大であれば、すべてを一度に視野に入れることは不可能になる。だからこそ事物が同時に知覚された場合が同時的空間概念のもっとも直接的な適用だとされる。しかしその場合でも何らかの補助手段を用いることで、私たちは広範囲にわたる事物の配列にも同時的空間概念を適用できるようになるだろう。遠く離れた三つの事物の配置は、それぞれについての経験の関係を参照するのは異なる仕方では理解される。

この区別はより洗練されるべきだろう。しかしエヴァンズは同時的空間概念の内容を正確に確定することは難しいとして、これ以上の記述は与えられていない。実際この点は後に彼の不十分さとカントの議論の特色を評価する場面にも関わってくる。しかしそれでも二つの異なる空間概念があることは理解可能であろう。この点が理解されれば、ここでは十分である。

## 2. 2 簡単そうに見えて簡単でないこと

以上の区別を踏まえてエヴァンズが指摘するのは、継起的空間概念の貧しさである。継起的空間概念によっては、私たちが日常で用いている空間的把握はもたらされず、対象の同時性は理解されないと彼は言う。

まず注意すべきは、継起的空間概念であっても多くのことを理解させるという点である<sup>14</sup>。先に見たように継起的空間概念しか用いることができなくても、事物の配置などはある意味で知られるとされる。他にも継起的空間概念を用いて、自分が移動したかどうかは判定されうるかも知れない。例えば先のような仕方では継起的空間概念を用いる主体が a、b、c の配置を知ったとしよう。その上で主体が「abb」という経験の系列を得たとする。このとき主体は、事物が abc の順に並んでいることと、自分が経験した事柄を踏まえることで、自分が最後には移動を止めたということを理解できるかも知れない。このように継起的空間概念は事物の配列に関する知識をもたらし、それは自分の移動に関する知識の基礎として用いられうる程度には豊かなものであると言える。しかしそれでも継起的空間概念は真性の意味での事物の同時性を理解させるには至らないとエヴァンズは指摘する。

同時的空間概念と対比することで継起的空間概念の不十分さは理解される。前者の場合、もたらされるのは知覚の有無から独立した対象の配置についての理解である。このとき知覚されている事物もそうでない事物もまったく同じように存在していると考えられている。例えば直線上にならぶ三つの事物であれば、今そ

の内の一つが知覚されていなくても、それは今知覚されている二つと同じように存在し、直線上に並んでいると考えられる。これが同時的空間概念の特徴である。このことをエヴァンズは次のように表現する。

同時的空間概念を用いるいかなる理論も、独立に実在する実在性という考えを、同時にかつまったく同じ意味で実在する知覚されているものと知覚されていないものという考えを体現する。(Evans [1980] 1985, 287)

同時的空間概念がもたらすのは、今は知覚されていない事物でも、それは離れた場所に、知覚されたときと変わらず存在し続けている、という理解である。これは私たちの空間的把握を説明するものだろう。

これに対して継起的空間概念はどうか。先に述べたように継起的空間概念は主体の経験によって説明される。それによれば、例えば a と b と c が一直線上に並んでいることは、「a を経験したら c を経験する前に b を経験しかつそれぞれの経験をj得るために要する時間が最短である」というような仕方で理解されることになる。これは、経験されていない事物について継起的空間概念は何も教えないということを意味する。継起的空間概念は「ある経験をしたら次は別のある経験をjする」ということを教えるものの、経験が生じなかった場合のことは何も教えない。したがって、知覚されていない事物がどうなっているかは継起的空間概念によっては知られないのである。換言すれば、継起的空間概念しか使えない主体は知覚から離れた実在について理解する資源をもたないのである。したがって継起的空間概念は、知覚されていない事物が同時に空間内に存在するという考えを支えられないのである。つまり、継起的空間概念は空間に関する理解を提供するように思われるものの、実際は私たちの日常的な実践に比べてかなり貧しいものしか与えないのである。先に知覚した事物が知覚されていない現在どうなっているかを考える手だてを、継起的空間概念は与えてくれない。

この貧しさは次のようにも表現されている。

同時的空間命題とは異なり、継起的空間命題は経験における順序に関する命題とは異なるレベルにはなく、それ故にそれを潜在的に説明するものではない。(Evans [1980] 1985, 287)

まず、通常私たちが行っている空間的把握は経験から離れた実在の理解をもたらすものであろう。だからこそ私たちは事物の配列を理由に自分の経験を説明したりするのである。例えば自分がなぜ「abc」という経験を順に得たかを、事物がabcの順に並んでいることと、そこをその順に自分が移動したことから私たちは説明する。しかし先に見たように、継起的空間概念は主体の経験に終始しているため、経験を説明する経験以外の要素を与えられないのである。

### 2. 3 エヴァンズから得られる教訓と第三類推の問題点

エヴァンズから得られる教訓はまず、空間内で事物の同時存在を考えるためには思ったよりも多くのことが必要だということである。先に見たように継起的空間概念は一見それほど貧しいものではなかった。主体に自分の移動を理解させる程度には豊かなのであり、その意味で「場所」を理解させると言われうる。しかしそれでも継起的空間概念は同時に存在する事物という考えに到達できない。同時的空間概念においてもたらされる事物の配置の理解は、思ったよりも複雑なものである。彼の議論はこの点に関して説得的だと言える。そして以下で見るようにエヴァンズが継起的空間概念に見出した問題は、第三類推においてカントが相互性のカテゴリーを要求した背景を理解する際に重要になる。

ところで、私たちの空間的把握が同時的空間概念により説明されるものだという前提に基づき、継起的空間概念がそこに到達しないことをエヴァンズは示した。したがって彼は同時的空間概念がどのように実現されるかについては特に考察していない。先に見たように同時的空間概念の内実はそれほど詳しく解説されないままである<sup>15</sup>。しかし、私たちの実践が同時的空間概念のもたらすような理解に基づいているのであれば、それがどのようにして実現されるのかはさらに問われるべきだろう。そして第三類推に関する第二の問題に答え、相互性のカテゴリーのはたらきを明らかにすることは、まさに同時的空間概念の実現形態を明らかにする作業に相当する。

### 3. なぜ相互性のカテゴリーが必要なのか

ここでは第一の問題、相互性のカテゴリーがなぜ同時存在の認識のために必要なのか、に答えることにする。まずは第三類推の記述を追い、相互性のカテゴリーが要求される経緯を確認する。続いてエヴァンズの指摘を参照し、それによって第一の問題に答える。

先に第三類推を概観した際に述べたように、相互性のカテゴリーは複数の事物に関する知覚の順不同性から同時存在を認識するために要求されていた。まずはその場面から詳細に検討していく。知覚の順不同性に基づいて、事物の同時存在が理解されることをカントは次のように確認する。「経験的直観において、ある事物の知覚が別の事物の知覚へと交互に継起しうるならば、同時に事物は存在する」(B257)。ある事物を知覚した後に別の事物を知覚し、そしてその逆も可能だったと思われれば、事物が同時に存在しているとされると、この引用は述べている<sup>16</sup>。

さてまず確認しておくべきは、知覚の順不同性の正確な内容である。カントが意図しているのは、諸知覚が実際に交互に生じるのではなく、先の B257 の引用にもあるように知覚が「交互に継起しうる」ことである<sup>17</sup>。したがって知覚の順不同性は正確には、順不同に知覚が生じる可能性として理解されるべきである。つまり、二つの事物を順に知覚した際に「もし逆の順序で始めていても、同じ事物を逆の順で知覚できただろう」と考えることが知覚の順不同性の内容である<sup>18</sup>。

こうしてみると、少なくとも単なる知覚だけでは確かに知覚の順不同性は理解できないように思われる。例えば実際にカステラとハンバーグを順に見ただけでは、一方の知覚には他方の知覚との関係は含まれていない。したがってカステラの次にハンバーグを見たということ以上の情報は与えられない。「ハンバーグを見ているときにカステラを見ることも、そしてその逆もありえた」と考えるにはさらに別の手がかりが必要だろう。

しかしここからすぐさま相互性のカテゴリーが必要だとはならない。相互性のカテゴリーでなくても、例えば経験の一般化は知覚の順不同性を支えることができるだろう。知覚が逆の順序でも生じたということを、これまでいつもそうだったという経験の一般化から捉える途がある。ハンバーグとカステラを逆順でも見られることは「これまでいつも逆の順序でも見られたから」という仕方でも理解されるように思われる。なぜカントは相互性のカテゴリーが必要だと言うのか。重要なのは次の箇所である。

したがって、知覚の交互の継起が客観に基づけられ、そしてそれによって同時存在が客観的に表象されると言うためには、これらの外的に互いに同時存在する諸事物の規定が相互に継起することについての悟性概念が要求される。

(B258)

まず、引用の最後に言われる「これらの外的に互いに同時存在する諸事物の規定が相互に継起することについての悟性概念」は、後に相互性のカテゴリーだとされる<sup>19</sup>。したがってここでは、知覚の順不同性に基づいて同時存在を認識するには、相互性のカテゴリーが必要だ、と述べられていることになる。しかし引用をよく見ると分かるように、カントは知覚の順不同性という経験の性質のみに基づいて、同時存在が知られるとは述べていない。彼は「知覚の交互の継起が客観に基づけられ、そしてそれによって同時存在が客観的に表象されると言うために」相互性のカテゴリーが必要だとしているのである。重要なのはこの「知覚の交互の継起が客観に基づけられ」の部分である。カントは同時存在を認識する手がかりとして、知覚の順不同性という経験の性質だけでなく、それを客観に基づけることも考えていることが分かる。知覚の順不同性が何らかの仕方で客観に基礎をもつことが理解されてはじめて、同時存在が知られるのである。言ってみれば、知覚の順不同性とそれを説明する客観の状況の二つによって、同時存在が知られるとカントはここで述べている。そしてそのために相互性のカテゴリーが要求されているのである。

カントのこの発想を理解するためには、エヴァンズが継起的空間概念に関して行った指摘を思い起こすのが有用である。主体の経験の観点からすべて説明されるような理解では、たとえそれが一見して空間に関する理解であったとしても、私たちが用いているような空間の理解とは遠く隔たっている。そうした経験の段階に終始する理解では、経験から離れた実在がどうなっているかをまったく支えられないからである。したがって、空間において事物が同時に存在していることを理解するためには、経験の段階以上のものを考えることが主体に要求される。これがエヴァンズの指摘だった。この指摘を踏まえると、カントがエヴァンズと同様の問題意識を抱いていたことが分かるだろう。カントが相互性のカテゴリーに担わせる役割は、知覚の順不同性という経験の性質を世界にある客観の側に基づけることである。なぜカントがこう考えたかと言えば、カントもエヴァンズと同様に、主体の経験にのみ基づく場合、同時存在の認識は成立しないと考えたからである。

このことは両版共通箇所からも窺うことができる。カントはそこで、空虚な空間によって諸実体が完全に隔てられている状況を想定する。これは知覚された事物の間の相互性がまったく考えられず、相互性のカテゴリーが使えない状況である。その際には次のようなことが生じると言われる。

一方の実体から他方の実体へと時間において進行する知覚は、確かに後続する知覚を介して、後者〔の実体〕にその現存在を規定するものの、現象が客観的に第一の実体に継起しているか、むしろ第一の実体と共に同時に存在しているかは区別できない。(A212/B259)

二つの事物を順に知覚した場合に関して、以下のことがここで言われている。もし相互性のカテゴリーがなければ、その知覚は最後に知覚した事物が存在していることは教える。しかし、最初の事物と今知覚している事物の関係はまったく教えられない。最初の事物が第二の事物に変化したのか、それとも二つは同時に存在しているのかがまったく分からなくなる。これは、相互性のカテゴリーを欠いて今知覚していることしか理解できなくなった場合、主体は世界の側で何が生じているのかがまったく分からなくなるからである。主体は自らの経験しか理解できない場合、経験されていない事物がどうなっているかは考えられない。したがって当然、さっき知覚した事物が今変化しているのか同時に存在しているのかをその主体は決定できないだろう。これが第三類推の問題意識であり、まさしくエヴァンズが継起的空間概念について抱いた問題意識と同様のものである。そして継起的空間概念の苦境から抜け出し、主体が自らの知覚のみならず世界の状況を考え、最終的に同時存在を認識するために相互性のカテゴリーは要求されている。カントが考えている筋書きは、相互性のカテゴリーを備える主体は自らの知覚の順不同性を客観に基づく形で理解し、同時存在を認識できるようになるというものだろう。

このように相互性のカテゴリーが要求される背景は明らかになった。そしてそれによって、知覚の順不同性を支える別の候補をカントが排除していることも明らかとなる。なぜなら経験の一般化は結局、その人のこれまでの経験にしか関わっておらず、その人の経験を世界の側に、つまり客観の側に基づけるものではないからである。したがって経験の一般化は確かに知覚の順不同性を理解させるかも知れないものの、それでは同時存在は知られないのである。では相互性のカテゴリーは実際にどのようにして、知覚の順不同性を客観に基づけ、同時存在の認識をもたらすのか。これを最後に検討する。

#### 4. 相互性のカテゴリーはいかにしてはたらくのか

ここでは第二の問題、相互性のカテゴリーの実際のはたらき方について論じる。残念ながら相互性のカテゴリーが実際にはたらく仕方は、部分的にしか明らかに

できない。というのも相互性のカテゴリーは実際には、先行する第一類推と第二類推で扱われる実体のカテゴリーと因果性のカテゴリーと合わさってはたらくものであり、本稿でそのすべてを扱えないからである。

それでも少ないながらも第三類推には手がかりがある。カントの記述から見えてくる相互性のカテゴリーの内実は、事物を知覚した際にその事物の場所が自分の身体の場所との関係で理解され、それを通じて事物同士の場所が理解されるというものである<sup>20</sup>。主体の身体的位置を経由するこの考えは以下の二つの引用で示唆されている<sup>21</sup>。

私たちの目と諸天体の間で戯れる光が、私たちとそれらとの間の間接的相互性をもたらし、そしてそれによって諸天体の同時存在を示す。(A214/B260)

離れた星から地表に光が届くまでに多くの時間がかかることを現代の私たちは知っているため、この引用はいささか時代遅れに響く。しかしその点を抜きにするならば、ここからは同時存在を理解する順序を読み取ることができる。カントが述べているのは、まず知覚された事物と私たちの間の関係が相互性の形で理解され、その後に知覚された事物同士の同時存在が理解されるという順序である。相互性の内容を場所の関係として理解するなら、これが意味するのは、知覚された事物と自分の身体間の場所の関係がまず理解され、その後に事物同士の場所の関係が理解される。これによって事物同士が同時に存在していることが理解される。こうしたことが述べられている。

さらに続けてカントは次のように言う。

いたるところで物質が私たちの場所の知覚を可能にしなければ、私たちは経験的にいかなる場所も変えることができず（この変化を知覚できず）、物質はその相互の影響を介してのみ、その同時存在を示すことができ、そしてそれによって、遠く離れた諸対象まで、物質の共在（Koexistenz）を（間接的にであっても）示すことができる。(A213/B260)

この引用は場所の理解が同時性の理解に必要であることを述べている。自分の移動を理解することに話移ってはいないものの、同時性と場所の関係は先に見た引用と同様の順序である。まず知覚によって事物と私の場所の関係が理解される。この引用ではこのことが自分の移動を理解するのに必要だとされる。次いでカン

トは事物同士の間に関係に話を移している。具体的な説明はないものの、それを諸事物の場所の関係と考えることは自然であろう。次にはこの関係によって初めて諸事物の同時存在が示されると言われる。つまり、まず事物と自分の場所の関係が理解され、次いでそれを通じて事物同士の場所の関係が理解される。これによって事物同士の同時存在が示されるのである。なお引用の最後では、こうした同時存在の理解が遠くの事物にまで拡大されうることが言われている<sup>22</sup>。

例えばまずカステラを見たときに私はカステラが自分に対してどの位置にあるのかを理解する。そして同時に自分がカステラに対してどの位置にいるのかも理解するだろう。次いで同じ事を私はハンバーグにも行う。この二つを行ったことで私は、ハンバーグとカステラが互いにどのような場所にあるのかを理解できるようになる。

先の二つの引用ではカントはすぐにここから、事物の同時存在が示されると結論している。しかし実際にはもう少し段階が必要である。というのも、元々カントが導入したように、知覚の順不同性を客観に基づけ、そこから事物の同時存在を認識するために相互性のカテゴリーが要求されたからである。この点を補う必要がある。しかしそれは比較的容易に行われる。別々に知覚された事物の場所が分かっているならば、それに基づいて知覚が順不同に行われうことは理解されるだろう。例えばもしカステラとハンバーグの場所が先のように理解されれば、私はカステラを見ているときにも、ハンバーグを見ることができただろうとそれらの場所を理由にして考えられる。つまり知覚の順不同性を考えられる。なぜなら、自分はいまカステラが見える位置にいるものの、別の場所にいればハンバーグを見られただろう、と考えられるからである。そしてこれはまさに、自らの経験ではなく世界の状況に基づいて、知覚の順不同性を理解することである。かくして、カステラとハンバーグに関する知覚の順不同性が望ましい形で理解されるだろう。そしてこのとき二つが同時に存在すると私たちは考えることになるだろう。

## 5. 結論

改めてここまでの成果をまとめることにする。第三類推のカントの問題意識は、主体の経験のみに基づいては事物の同時存在が認識されないというものだった。このことはエヴァンズを参照することでよりはっきりと理解されただろう。そしてカントは知覚の順不同性を客観の側に基礎づけることで事物の同時存在が知られるとし、そのために相互性のカテゴリーが必要だとしたのである。さらにモリ

ソンの方針を踏まえてカントの記述を検討すると、相互性のカテゴリーは事物同士の間を、主体自身の間との関係で理解させる形ではたらくことが明らかになった。したがってこれらの知見をまとめると、同時存在の認識がもたらされるカントの筋書きは以下のようなものである。複数の事物に関する知覚が得られた際に、相互性のカテゴリーによって諸事物の間が理解される。これによっていくつかの知覚は順不同に生じたものと考えられる。そしてその際には、諸事物が空間内に同時に存在することが知られるのである。これが、本稿が二つの問題に答えることで明らかにした、空間における同時存在のカント的理解である。もちろん問われるべき課題は残っているものの、一定の成果を得たとしてここで本稿を閉じる。

<sup>1</sup> カントは相互性（*Gemeinschaft*）と相互作用（*Wechselwirkung*）をほとんど交換可能な仕方で用いている。本稿では基本的に相互性の語を中心に用いることとする。

<sup>2</sup> 命題及び「証明」と題された箇所は B 版で加筆修正されている。A 版の命題は「すべての実体は、同時に存在する限りで、一貫した相互性（つまり互いの相互作用）のなかに存している」（A211）である。しかし大まかな内容は両版で変わらないと考える。

<sup>3</sup> Morrison（1998, 269）を参照。

<sup>4</sup> 座標内で事物の間を定める場合は違おうだろう。しかし通常私たちは事物の間を座標の形で理解していないように思われる。カステラが点（1, 2）の位置にあるとは考えないだろう。

<sup>5</sup> A183/B225-6 を参照。

<sup>6</sup> 「相互性のカテゴリーは、その可能性という点で、単なる理性によってはまったく理解されえず、したがってこの概念の客観的実在性は直観無しでは、しかも空間における外的な直観なしでは、洞察することが不可能である」（B292）とある。

<sup>7</sup> モリソンは自らの解釈が、カントの後年の『自然科学の形而上学的原理』と整合することを示そうとしている。Morrison（1998, 269-76）を参照。

<sup>8</sup> Evans（[1980] 1985）は空間が客観的世界の経験のために必要だというテーゼを検討するものである。エヴァンズはストローソンがこのテーゼに対して行った検証を批判しつつ、自らの論点を提示する。エヴァンズの議論は、ストローソンが用意した聴覚的感覚しか受け取れない主体の想定に基づいて行われている。この主体は場所を移動することができ、様々な音を聞いたか聞きなかつたりする。この主体はヒーロー（Hero）と呼ばれる。Strawson（1959, 59-86）を参照。客観性の理解のためにヒーローに不足している要素を考察することで、空間の理解が客観性の理解のために必要かどうかを考察されていく。なお、ここで客観性の理解として考えられているのは、知覚されていない実在を理解することである。したがって改めてまとめるなら、彼らがヒーローの想定を用いて考察するのは、知覚されていない実在の考えを理解するために空間の考えが必要かどうか、である。ストローソンの不十分さを指摘しつつも、論文の前半部でエヴァンズはこの問題に肯定的に答える。本稿が扱う第4節はこうした結論の後に登場する。

<sup>9</sup> エヴァンズの理解する限りで、ストローソンがヒーローに認めているのは継起的空間概念である。その不整合を指摘するのがエヴァンズの議論の本来の目的であるものの、本稿はひとまずそれを脇に置くことにする。

<sup>10</sup> Evans（[1980] 1985, 283）を参照。

<sup>11</sup> Evans（[1980] 1985, 283-4）を参照。

<sup>12</sup> この空間概念が理解しづらい場合、ヒーローの想定を持ち出すのがよいかも知れない。聴覚経験しか持たない主体の想定は、継起的空間概念の理解のよい具体例となるだろう。

<sup>13</sup> エヴァンズは同時的空間概念が視覚に特有のものとは考えていない。空間的把握が特定の感

覚様相に相対化されていないことについては Evans (1985a) を、またそれとカントの空間論の関連については岩井 (2015) を参照。

<sup>14</sup> Evans ([1980] 1985, 288-9) を参照。

<sup>15</sup> Evans (1982) には同時的空間概念の基礎となり得るような認知的地図 (cognitive map) に関する考えが展開されている。

<sup>16</sup> なおこの直後でカントは私たちには時間を知覚することができないとする。これは第三類推に限らず B219 や A183/B226 など、経験の類推で頻出するテーゼであり、その内容は必ずしも明らかではない。しかしここ B257 では同時性をそのまま理解して、そこから知覚の順不同性が理解されるのではないと述べられている。つまり同時存在をそのまま直接に理解することはできないということであろう。

<sup>17</sup> これは月と地球の例を挙げる場合も、A 版で対応する話をする場合も変わらない。

<sup>18</sup> アリソンがこの点を正しく指摘している。Allison (2004, 265) を参照。

<sup>19</sup> B258 を参照。

<sup>20</sup> 本稿がモリソンの方針にしたがうことを思い起こされたい。しかし主体の身体に関する指摘は本稿のものである。

<sup>21</sup> 相互性のカテゴリーがはたらく場面でカントは身体役目を強調するとロングネスも言う。Longuenesse (1998, 391) を参照。確かに身体がなければ自らの場所を考えることはできないだろう。しかしカント自身が主体の身体をどのように考えていたのかは大問題であるため、ここでは深入りしないことにする。

<sup>22</sup> 一旦その同時存在が理解された諸事物があれば、離れた場所にある事物の同時存在も認識可能である。同時存在が確保されたグループ内の一つと新しい事物の間に知覚の順不同性が理解されれば、新しい事物も元々のグループと同時に存在していると言われるだろう。

#### [参考文献]

『純粹理性批判』の参照は慣例に従い、第1版を A、第2版を B としてその後に頁数を付す形で行う。カントからの引用における傍点は原文ゲシュペルトである。

Allison, Henry E. 2004. *Kant's Transcendental Idealism*, Revised and Enlarged Edition, Yale University Press.

Evans, Gareth. [1980] 1985. "Things Without the Mind," in Evans 1985b, 249-90.

———. 1982. *The Varieties of Reference*, John McDowell (ed.), Oxford University Press.

———. 1985a. "Molyneux's Question," in Evans 1985b, 364-99.

———. 1985b. *Collected Papers*, Oxford University Press.

Kant, Immanuel. 1998. *Kritik der reinen Vernunft*, Felix Meiner Verlag.

Longuenesse, Béatrice. 1998. *Kant and the Capacity to Judge*, Charles T. Wolfe (trans.), Princeton University Press.

———. 2005. *Kant on the Human Standpoint*, Cambridge University Press.

Morrison, Margaret. 1998. "Community and Coexistence; Kant's Third Analogy of Experience," *Kant-Studien*, 89, 257-77.

Strawson, Peter Frederick. 1959. *Individuals; An Essay in Descriptive Metaphysics*, Routledge.

岩井拓朗. 2015. 「カントにおける空間把握とモダリティ」, 『論集』, 第 33 号, 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室, 76-89.